

太宰治「新釈諸国噺」出典考

寺 西 朋 子

まずはじめに、すでによく知られている「新釈諸国噺」の題目とそれぞれの出典とをあげておく。

- 貧の意地―諸国はなし 卷ノ三、大晦日はあはぬ算用
- 大力 ―本朝二十不孝 卷五ノ三、無用の力自慢
- 猿塚 ―懐硯 卷四ノ四、人真似は猿の行水
- 人魚の海―武道伝来記 卷二ノ四、命とらるる人魚の海
- 破産 ―日本永代蔵 卷五ノ五、三匁五分曙のかね
- 裸川 ―武家義理物語 卷一ノ一、我物ゆへに裸川
- 義理 ―武家義理物語 卷一ノ五、死なば同じ浪枕とや
- 女賊 ―新可笑記 卷五ノ四、腹からの女追剥
- 赤い太鼓―本朝校陰比事 卷一ノ四、太鼓の中は知らぬが因果
- 粹人 ―世間胸算用 卷二ノ二、訛言も只は聞かぬ宿
- 遊興戒 ―西鶴置土産 卷二ノ二、人には棒振虫同前に思はれ
- 吉野山 ―萬の文反古 卷五ノ四、桜の吉野山難儀の冬

太宰の選んだこれらの原話は、いずれも、構成のしっかりした、西

鶴作品の中でも成功作といえるものである。太宰は、彼の「新釈諸国噺」をつくるにあたって、原話の大筋はそのまま利用し（「吉野山」は例外）、「それにまつはる私の空想^{註(太宰)}を自由に書き綴る」という方法をとっている。

しかし、彼の言う、この書き加えられた部分も、実は、すべて太宰自身の空想によって創作されたものではない。他作品からの借用が数多くみられるのであって、中には、すでに先学の諸家に依って指摘されたものが数例ある。「貧の意地」の原田内助が気違いの真似や切腹の真似をして掛取りを追いはらう箇所は、「世間胸算用」卷二ノ四と卷一ノ二から。また「破産」における萬屋の描写は、「日本永代蔵」卷二ノ一をふまえたもの。△暗闇に鬼▽のたとえは、「世間胸算用」卷五ノ三から。紙小捻の着想は、「日本永代蔵」卷二ノ二から。養子が茶屋遊びする場面は、「好色五人女」卷一の清十郎勘当の場面の投影。（以上、松谷昭彦氏「新釈諸国噺」・『国文学』昭和四十二年十一月号）「大力」の才兵衛が牛をかかげる箇所は、「諸国はなし」卷四ノ二から。「吉野山」は、「萬の文反古」前記卷五ノ四に卷四ノ三をもない交ぜにして作られたもの。（以上、山田晃氏「治と西鶴と現代作家」・『解釈

と鑑賞」昭和三十二年六月号）等である。

本稿では、これまで指摘されたもの以外、私が気づいたものを、作品順に列記して、その出典を明らかにしてゆきたい。

なお、テキストとして、西鶴作品は『定本西鶴全集』を、太宰の作品は昭和三十一年版『太宰治全集』（筑摩書房）第六巻を使用した。

（引用文の傍線部は借用の個所を示す）

。「大力」

(一) 西鶴作品の中で、息子、才兵衛の無用の力自慢を、父親が「それ人のもてあそびには琴碁書画の外に。茶の湯鞠楊弓謡など聞よし。なんぞや裸身となりて五体あぶなき勝負。さりとて宜しからず。自今是を止て。よき友にまはしはり四書の素読ならへと。」説教する個所を、太宰は次のように描く。

父親は、息子の馬鹿力で手向いされたらかなわないとあきらめ顔にしていたが、息子が他人を怪我させ、皆のにくしみの的になっている有様をみて、或る日、びくびくしながら猫撫声で意見を言う。「はだかになつて五體あぶない勝負も、夏は涼しい事でせうが、冬は寒くていけませんでせうねえ。」父親のことは才兵衛は噴き出して、「角力をやめろと言ふのでせう？」と軽く問い返した。

親爺はぎよつとして汗を拭き、

「いやいや、決してやめろとは言いませんが、同じ遊びでも楊弓^①など、どうでせうね。」

「あれは女子供の遊びです。大の男が、あんな小さい弓を、ふしくれ立つた手でひねくりまはし、百発百中の腕前になつてみたところ、どろばうに襲はれて射ようとしても、どろばうが笑ひ

出しますし、さかなを引く猫にあてても猫はかゆいとも思やしません。」

「さうだらうね。」と賛成し、「それでは、あの十種香とか言つて、さまざまの香を嗅ぎわける遊びは？」

「あれもつまらん。」香を嗅ぎわけるほどの鼻があつたら、めしのかげのを逸早く嗅ぎ出し、下女に釜の下の薪をひかせたら少しは家の始末のたしになるでせう。」

「なるほどね。では、あの蹴鞠は？」

「足さばきがどうかうのと言つて稽古してゐるやうですが、塀を飛び越えずに門をくぐつて行つたつて仔細はないし、闇夜には提灯をもつて静かに歩けば溝へ落ちる心配もない。何もあんなに苦勞して足を軽くする必要はありません。」

「いかにも、そのとほりだ、でも人間には何か愛嬌が無くちやいけないんぢやないかねえ。茶番の狂言^②なんか稽古したらどうだらうねえ。家に寄合ひがあつた時など、あれをやつてみんなにお見せすると、——」

「冗談を言つちやいけない。あれは子供の時こそ愛嬌もありませんが、髭の生えた口から、まかり出でたるは太郎冠者も見る人が冷汗をかきますよ。お母さんだけが膝をすすめて、うまい、なんてほめて近所のもの笑ひの種になるくらゐのものです。」

「それもそうだねえ。では、あの活花は？」

「ああ、もうよして下さい。あなたは毫碌してゐるんぢやないですか。あれは雲の上の奥深きお方々が、野辺に咲く四季の花をこらになる事が少いので、深山の松かしはを、取り寄せて、生

きてあるままの姿を御眼の前に眺めてお楽しみなさるためにはじめた事で、わしたち下々の者が庭の椿の枝をもぎ取り、鉢植ゑの梅をのこぎりで切つて、床の間に飾つたつて何の意味もないぢやないですか。花はそのままに眺めて楽しんでゐるはうがいいのだ。」言ふ事がいちいち筋道がちやんと立つてゐるので親爺は閉口して、(後略)

右の箇所は、『西鶴織留』世の人心巻三ノ二「芸者は人をそしりの種」からの借用である。次にその該当する箇所を引用する。

人間の第一は筆道執行の後学文の外なし。今の世の人心分限相応より高うとまり。鞆場の柳陰に日を暮し九損一徳に早足がきけばとて別の事なし。闇き夜は挑灯もたせて静に行は溝へはまらぬ物也。殊更楊弓官女の業なり。いかにしても大男の慰み事にはぬるし。なをまた諸職人の鍮鍬を持たる手には似合ず。よし又百筋ながら当りあるひは大金書の看板に付てから何。此矢自然の時の用に立せめて

① 盗人を射とめるにもあらず。肴引猫にあてゝも更におとろく事なし。十柱香はいよゝ福徳そなはれる隙人の花車あそび。是聞分る鼻にて食のこげるを聞出し。釜の下の薪をひかすれば始末の種にも成そかし。(中略)地狂言は子とも時也髭のはへたる口から罷出たる者は大いうつけの沙汰して見る人汗をかきけるに。此男の母親はかり誉ける。立花は宮御門跡がたの御手業なり。野辺遠き四季の草花品々を見給はぬ人のために。深山木の松柏しば人の手にかゝるを集めてあそばされしに。近年いつれも奢る心より用捨せず。繼木の椿をもき取砥植の梅もときを引切。霊地の荷葉を折せ神山の楳をとりよせ。我まゝのふるまひ草木心なきにしもあらず。花のうら

みも深かるべし

(二) 原文で、母親が息子に「もまたそなたも十九の春なれば。花見がてらの都にのぼり。金銀ためしはこんな為なれば。島原に行て太夫を残らず見尽し。大坂の芝居子に出合。其若衆氣にいらばすくに身請して。三津寺新屋敷とやらに(重刻)家家でも買とらせ。心やすき立より所にせられよ。この度千両式千両つかへばとて。跡の減内蔵でもなし。首尾は母にまかせよ」と言いふくめる場合に、太宰は次のような細々とした条件を付加している。

まあ、お前も、花見がてらに上方へのぼつて、島原へでも行つて遊んで、千両二千両使つたつて、へるやうな財産でなし、気に入つた女でもあつたら身請して、どこか景氣のいい土地にしやれた家でも建て、その女のひとと、しばらくままと遊びなんかして見るのもいいぢやないか。お前の好きな土地に、お前の気ままの立派なお屋敷をこしらへてあげませう。さうして、あたしのはうから、米、油、味噌、塩、醤油、薪炭、四季折々のお二人の着換へ、何でもとどけて、お金だつて、ほしだけ送つてあげるし、その女のひと一人だけで淋しいならば、お妾を京からもう二、三人呼び寄せて、その他、振袖のわかい腰元三人、それから中居、茶の間、御物縫ひの女、それから下働きのおさんどん二人、お小姓二人、小坊主一人、あんま取の座頭一人、御酒の相手に歌うたひの伝右衛門、御料理番一人、駕籠かき二人、御草履取大小二人、手代一人、まあざつと、これくらゐつけてあげるつもりですから、悪い事は言はない、まあ花見がてらに、

これらの条件は、『萬の文反古』巻一ノ二「榮花の引込所」、跡継

ぎが色好みするため身代がつぶれると心配した手代達が、その遊びをやめさせるために出した条件を、そのまま借用したものである。

面々相談の目録。所は御見立あそばされ座敷を仕事仕り。米油みそ塩焼木折々の御小袖は此方より進上申。年中の御つかひ金として式百四十兩相わたし京より百兩きりまいの御妾女式人が、へ。此大ふり袖の腰もとづかひ三人。中居茶の間御物縫女。下女式人小性式人小坊主老人。あんま取の座頭御酒の相手に哥うたひの伝右衛門。御料理人老人六尺式人御草履取大小式人手代の人づつ相つめ以上二十式人にて。御心のまゝに御暮しなされ候ば。二年三年の立申候は夢の間の御事に候。

また、この一ノ二の最後の評文「此書付の栄花にては夷が嶋にても住べし」を、太宰は「当り前さ。蝦夷が島の端でもいい、立派なお屋敷で、そんな栄華のくらしを三日でもいい、あとは死んでもいい。」という手代の言葉に借用している。

。「人魚の海」

(三) 中堂金内が鮭川という入海から小舟に乗って汀から八丁ばかり離れた頃、「白波俄に立さはぎ五色の水玉敷ちりて浪二つにわかりて人魚目前にあらはれ出した。舟人おどろき何れも気をうしなひける。」と舟人がおどろく原作の場面を、太宰は次のように描いている。

(前略) 客は恐怖のために土色の顔になつて、思ふ女の名を叫び出し、さらばよ、さらばよ、といやらしく悶えて見せる者もあり、笈の中より観音経を取り出し、さかさとも知らず押しいただき、そのまま開いておるおる読み上げる者もあり、飄筆を引き寄せ中

に満たされてある酒を大急ぎで口呑みして、これを飲みのかしては死んでも死にきれぬ、からになつた飄筆は浮袋になります。と五寸にも足りぬその小さいひさを、しさいらしい顔つきで皆に見せびらかす者もあり、なんの意味か、しきりに指先で額に唾をなすりつけてゐる者もあり、いそがしげに財布を出して金勘定、一両足りぬと呟いてあたりの客をいやな眼つきで睨む者もあり、^④いのちの瀬戸際にも、足がさはつたとやらで無用の口論をはじめる者もあり人さまざまに騒ぎ立て、波はいよいよ高く、船は上下に荒く震動し、いまは騒ぐ力も尽き、船頭がまづ船底にたふれ伏し、おゆるしなされ、と呻いて死んだやうにぐたりとなれば、船中の客、総泣きに泣き伏して、いづれも正体を失ひ、(後略)

この箇所は、「武道伝来記」卷三ノ三「大蛇も世に有人が見た様」と「本朝二十不考」卷二ノ三「人はしれぬ国の土仏」とからの借用である。次にその該当箇所を引用してみる。

④「武道伝来記」卷三ノ三「大蛇も世に有人が見た様」

盃流しの一曲を興じてうたふ所に俄に海上震動して白浪舟をゆりあげ水より少し下に五丈ばかりの竜うねり廻るを。見る者肝をけし船頭をあらけなく呵てこんな所へ乗て来るものか夕の夢見あしきにこまといふたを。女共がそれでは約束の義理が欠るといふて此様なこはい目をさせると啼出すと着物みなぬきて大小にくりつけ鬢鼻禪まで放して泳き支度をする。またかたはらより扱も残りおほい事は飄筆をもつて来ればまぎりと水を飲んで死ぬ物と悔む何も心にかゝる事はなけれど祝言してから十日にもならぬ女ばうが晩から淋しからうかと涙ながら我屋敷の方を詠めやりと

てもこち共は水心はしらぬと手を懐に入れて舩に寄かゝつて念仏く
りかへし彼観音の力を念せは浅き所を得んと読出すも有。船頭を
呼ば最御ゆるされましよ目か舞ましてと船底に息もたてず。

◎『本朝二十不孝』卷二ノ三「人はしれぬ国の土仏」

此中にも酔にうきを忘れ。鹿の巻筆の小哥唄は観音経読も有。
六字南無右衛門節の浄るりを語るも有。下戸は荷物明て旅硯に霧
をそゞぎ願状を書ぬ。又は一步小判を取出し四五年に折角延しけ
るかひなしと算用してゐるも有。今果べきもしらぬ命のうちに。

足がさはつたと口論をする機嫌も有。

(四) 中堂金内が人魚を射とめた後、船客の一人、妾の名を叫んで身悶
えしていた八十歳の隠居に、大宰は次のような登竜の話語らせて
いる。

①(前略) これすなはち登竜に逢ひござらぬ、と断じ、そもそもこ
の登竜は越中越後の海中に多く見受けられるものにして、夏日に最
もしばしばこの事あり、一群の黒雲虚空より下り来れば海水それに
吸はれるか如く応じて逆巻きのぼり黒雲湖水一柱になり、まなこを
こらしてその凄じき柱を見れば、はたせるかな、竜の尾頭その中に
歴々たりともの本にござつた。また別の一書には、或る人、江戸よ
り船にてのぼりしに東海道の興津の沖を過ぎる時に一むらの黒雲虚
空よりかの船をさして飛び来る、船頭大いに驚き、これは竜の此舟
を巻き上げんとするなり、急に髪を切つて焼くべしとて船中の人々の
こらす頭髮を切つて火にくべしに臭気ふんぶんと空にのぼりしかば、かの黒
雲たちまちに散り失せたりとござつたが愚老もし若かつたら、さいせんた
ちで頭髮を切るべきに生憎と言つて禿げた頭を真面目な顔して静かに撫で
た。

① この登竜の話は橋南翁著「諸国奇談 東遊記」の三之卷「登竜」の、
越中越後の海中夏の日竜の登るといふこと甚だ多し。黒竜多し。

黒雲一杯虚空より下り来れば、海中の潮水其雲に乗じ逆巻のぼり
黒雲の中に入る。其雲を又くはしく見れば竜の形見ゆることなり。
尾頭などもたしかに見えて、登る潮は滝を逆しまに懸るが如し。

(中略) 過し年淇園子の割記を見しに、其中に或人江戸より船
にてのぼりしに、東海道の興津の沖を過る時に一むらの黒雲虚空
より彼船をさして飛来たる。船頭大に驚き、是は竜の此船を巻上ん
とするなり、急に髪を切つて焼くべしとて、船中の人々残らず頭髮
を切て火に焼しに臭気空にのぼりしかば、彼黒雲忽ちに散失たり
と載られたり。

からの借用である。

(五) 人魚の事で、百右衛門にばかにされた中堂金内は、百右衛門に証
拠をみせるため、鮭川の入海の村の漁師をことごとく集めて、人魚の
死骸を捜そうとする。しかし、何日たつても人魚の死骸は現われない。
この場面に、太宰は金内に同情する古老の漁師を登場させ、その漁師
に次のような話をさせている。

「なあに、大丈夫だ。若い衆たちは、あんな事を言つてゐるけ
れど、おれたちは、たしかにこの海に、おさむらひの射とめた
人魚が沈んでゐると見込んでゐるだ。このあたりの海には、な、
昔からいろいろな不思議な事があるが、若い衆たちには、
わからねえ事だ。おれたちの子供の頃にも、な、この沖に、おき
なという大魚があらはれて、偉い騒ぎをしました。嘘でも何でも
ない、その大きさは二、三里、いや、もつと大きいかも知れ

ねえ。誰もその全身を見たものがねえのです。そのさかなが現はれる時には、海の底が雷のやうに鳴つて風もねえのに大波が起つて、鯨なんてやつも東西に逃げ走つて、漁の船も、やあれ、おきなが来たぞう、と叫び合つて早々に浜に漕ぎ戻り、やがて、おきなが海の上に浮んで、そのさまは、大きな島がはかに沖にいくつも出来たみたいで、これは、おきなの背中や鰭が少しづつ見えただのでして、全體の大きさは、とてもとても、そんなもんぢやありやしねえ。はかり知る事が出来ねえのだ。このおきなは、小さなさかなには見むきもしねえで、もつぱら鯨ばかりたべて生きてゐるのださうでして、二十尋三十尋の鯨をたばにして呑み込んで、その有様は、鯨が鰭を呑むみたいだつてんだから凄いちやねえか。だから鯨は、海の底が鳴れば、さあ大変と東西に散つて逃げますだ。おつかないさかなもあつたものさ。蝦夷の海には昔から、こんな化物みたいなさかなが、いろいろあつただ。(後略)

この話は、「諸国奇談 東遊記」四之巻「大魚」の、

(前略) 東蝦夷の海におきなといふ魚あり、其大さ二里三里にも及べるにや、つひに其魚の全身を見たる人はなし。春は此魚南に出て秋よりは北へ帰る。蝦夷の獵船は毎度出合ふ事なりとぞ。其魚来る時は海底雷の如く鳴りて、風無きに波浪起り鯨東西に逃走る。斯の如くなる時は、すはおきな来りたりとて獵船も早々に逃帰る事なり。稀々に海上に浮たるを見るに、大なる島いくつも出来たる如く也。是おきなの背中尾鰭などの少しづつ見ゆるなりとぞ。二十尋三十尋の鯨を呑こと鯨の鰭を呑が如くなる故、此魚来れば鯨東西に逃走るなり。誠に東蝦夷の海は即ち日本奥州の東海にし

て、東の方へは数萬里の間に国なく世界第一の大海なれば、斯の如き大魚も生ずるなるべし。からの借用である。

(四)五に利用されている「諸国奇談東遊記」は「大魚」その他二・三の巻が、「津軽」の中にも、利用されている。「人魚の海」は昭和一九年「新潮」一〇月号に発表され、「津軽」は一九年五月二日から六月五日までの太宰の津軽旅行ののち、七月に完成された。「新風土記叢書」としての性格からか、かなり多くの郷土史、地理書を参考にしているが、その時読んだ「東遊記」「人魚の海」に借用したようである。なお、「東遊記」の引用文は、袖珍名著文庫(明治42・8・23刊・富山房)による。

。「破産」

(六) 萬屋のあるじの性格描写として、太宰は次のような文章を付加している。

きらひなものは酒色の二つ、「下戸ならぬこそ」とか「色好まざらむ男は」とか書き残した法師を憎む事しきりにて、おのれ、いま生きてゐたら、訴訟をしても、ただは置かぬ、と十三歳の息子の読みかけの徒然草を取り上げてはりばり破り(後略)

これは、『西鶴俗つれ』卷一ノ一「過て克は親の異見患敷は酒の、父親が子供に酒をやめよといひ含める一節、

され共兼好とやらいふものが若き者の諺に下戸ならぬ社といふ事を書て言ならはせぬ。まだ生て居らば公事をしてなり共只はおかじと思へど。今はなき跡の形みの草子きくさへうとまし。

からの借用である。

(七) 恪番家であつた聿は、多額の金が自分の自由になると急に金を使つてみたくなるが、恪気の強い女房を望んで得ていたために、当然女房は恪氣をしだす。西鶴原文では、そのため聿は「世間憚り自から色遊びやめて酒吞で宵から寝より外はなし。亭主内を出ねばまして手代其灯の影に座を〴て慰みに帳面をくり小者は地等置ならひ家の調事ばかりなり。」とある。この個所を太宰は次のように描く。

(前略) ぶん殴るわけにもいかず、さりとて肥桶をかついで遊びに出掛けるのも馬鹿々々しく思はれ、腹いせに銭湯に出かけて、眼まひがするほど永く湯槽にひたつて、よろめいて出て、世の中にお湯銭くらゐ安いものはない、今夜あそびに出掛けたら、どうしたつて一兩失ふ、お湯に酔ふのも茶屋酒に酔ふのも結局は同じ事さ、とわけのわからぬ負け惜しみの屁理窟をつけて瘦我慢の胸をさすり、家へ帰つて一合の晚酌を女房の顔を見ないやうにしてうつつむいて飲み、どうにも面白くないので、^①やけくそに大めしをくらつて、ごろりと寝ころび、^②出入りの植木屋の太吉爺を呼んで、美作の国の七不思議を語らせ、それはもう五十べんも聞いてゐるので、腕まくらしてきよろきよると天井板を眺めて別の事を考へ、不意に思ひついたやうに小間使ひを呼んで足をもませ、女房の顔を見ると、むらむらつとして来て、おい、茶を持つて来い、とつつけんどんに言ひつけ、^③女房に茶碗をささげ持たせたまま、自分はやはり寝ながら頭を少しもたげ、手も出さずにごくごく飲んで、熱い、とこごとを言ひ、八つ当りしても、大将が夜遊びさへしなければ家の中は丸くをさまり、隠居はくすくす笑ひながら宵から楽寝、^④召使ひの者たちも、將軍内にいらつしやるとて緊張して、

^①ちよつと叔母のところへと怪しい外出をする丁稚もなく、裏の井戸端で誰を待つやらうろろする女中もない。番頭は帳場で神妙を装ひ、^②やたらに大福帳をめくつて意味も無く算盤をばちばちやつて、はじめは出鱈目でも、^③そのうちに少しの不審を見つけ、本気になつて勘定をし直し、長松は傍に行儀よく坐つてあくびを噛み殺しながら^④反古紙の皺をのぼし、手習帳をつくつて、どうにも眠くてかなはなくなれば、^⑤急ぎ読本を取り出し、奥に聞えよがしの大声で、徳は孤ならず必ず隣りあり、と読み上げ、^⑥下男の九助は、破れた菰をほどいて銭差を鉤へば、^⑦下女のお竹は、いまのうちに朝のおみおつけの実でも、と重い尻をよいしよとあげ、穴倉へはいつて^⑧青菜を捜し、お針のお六は行燈の蔭で背中を丸くして、^⑨ほどもものに余念がなさうな振りをしてゐて、^⑩猫さへ油断なく眼を光らせ、台所にかたりと幽かな音がしても、^⑪にやあと鳴き、^⑫いよいよ財産は殖えるばかりで、(後略)

これは『世間胸算用』巻二ノ三「尤始末の異見」からの借用である。該当する個所を次に引く。

是をおもへはおもしろからすとも勘忍をして我内の心やすく^①夜食は冷食に湯どうぶきかな有あい^②に借屋の親仁に板倉殿の瓢箪公事の咄しをさせ^③ことはりなしに高枕して^④腰元に足のゆびをひかせ茶は寝ながら内儀にもたせ置て手も出さずに飲けれども面^⑤の電將軍此内につゞく兵ものなければたれか外よりとかむる人なく^⑥楽みは是て済事なり且那うち^⑦にゐらるゝとて表の若ひ者とも、^⑧八坂へ出かぐる無分別をやめ又御池あたりの奉公人宿へ^⑨忍びの約束もおのつがらとまりて^⑩只はゐられず^⑪江戸状どもをさらへ^⑫失念した

る事ともを見出し主人の徳のゆく事有捨る反古こよりにひねるて
つちは又内かたへきこゆる程手本よみて手ならひするは其身の徳
なり宵寝の又七も鰯つゝみたる菰をほどきて錢さしをなへばたけ
は朝手まはしあしきとて蕪菜そろへけるお物師は日野ぎぬのふし
を一日仕事程取ける猫さへ眼三寸まいたを見ぬきさかなかけこ
とりとしても声を出して守りける旦那一人宿にゐらるゝ徳一夜に
さへ何程かまして年中につもりては大分の事そかし

また、同じ巻二ノ三の「女房は（中略）床で味噌塩の事をいひ出し
て」を、太宰は、「女房の毎夜の寝物語は味噌漬がどうしたの塩鮭の
骨がどうしたのと呆れるほど興覚めな事だけで、」という具合に取り
入れている。

。「裸川」

(ハ) 原作「我物ゆへに裸川」は、太平記などで既に知られている。青
砥左衛門の川に落した錢を拾わせるという話をもとにして、西鶴が武
士の理想の姿をえがき出そうとした作品である。しかし、太宰の「裸
川」における青砥左衛門は、原作の理想の武士像とちがつて滑稽人物
として戯画化されている。太宰は、青砥を戯画化するにあたって、太
平記」卷第三十五「北野通夜物語事付青砥左衛門事」の中の青砥のエ
ピソードを援用している。次に各々の該当する箇所を引用してみる。

太宰の作品から。

① 質素儉約、清廉潔白の官吏である。一汁一菜、しかも、日に三度
などは食べない。一日に一度たべるだけである。それでもからだ

は丈夫である。衣服は着たきりの一枚。着物のよこれが見えぬや
うに、濃茶の色に染めさせてゐる。真黒い着物は、かえつて、よ
これが目立つものなさうである。濃茶の色の、何だかひどく厚ぼ
つたい布地の着物だ。一生その着物いちまいで過した。刀の鞘に
漆を塗らぬ。墨をまだらに塗つてある。主人の北条時頼も、見る
に見かねて、

「おい、青砥。少し給料をましてやらうか。お前の給料をもつ
とよくするやうにと夢のお告げがありました。」と言つたら、青
砥はふくれて、

① 「夢のお告げなんて、あてになるものぢやありません。そのう
ちに、藤綱の首を斬れといふお告げがあつたら、あなたはどうし
ます。きつと私を斬る気でせう。」と妙な理窟を言つて、加俵を
断つた。欲の無い人である。給料があまつたら、それを近所の貧
乏な人たちに全部わけてやつてしまふ。

「太平記」卷第三十五から。（引用は日本古典文学大系による）
数十箇所ノ所領ヲ知行シテ、財宝豊ナリケレ共、衣裳ニハ細布ノ
直垂、布ノ大口、飯ノ菜ニハ焼タル塩、干タル魚一ツヨリ外ハセザ
リケリ。出仕ノ時ハ木鞘卷ノ刀ヲ差シ木太刀ヲ持セケルガ、叙爵
後ハ、此太刀ニ弦袋ヲゾ付タリケル。加様ニ我身ノ為ニハ、聊モ
過差ナル事ヲセズシテ、公方事ニハ千金萬玉ヲモ不借。又飢タル
乞食、疲レタル訴詔人ナドヲ見テハ、分ニ随ヒ品ニ依テ、米錢絹
布ノ類ヲ与ヘケレバ、仏菩薩ノ悲願ニ均キ慈悲ニテゾ在ケル。（中
略）或時相模守、鶴岡ノ八幡宮ニ通夜シ給ケル暁、夢ニ衣冠正

シクシタル老翁一人枕ニ立テ、「政道ヲ直クシテ、世ヲ久ク保タルト思ハゞ、心私ナク理ニ不暗青砥左衛門ヲ賞翫スベシ。」ト憊ニ被示ト覺ヘテ、夢忽覚テゲリ。相模守夙ニ婦、近国ノ大庄八箇所自筆ニ補任ヲ書テ、青砥左衛門ニゾ給ヒタリケル。青砥左衛門補任ヲ啓キ見テ大ニ驚テ、「是ハ今何事ニ三萬貫ニ及ブ大庄給リ候ヤラン。」ト問奉リケレバ、「^②夢想ニ依テ、先且充行也。」ト答給フ。青砥左衛門顔ヲ振テ、「サテハ一所ヲモエゴソ賜リ候マジケレ。且ハ御意ノ通モ歎入テ存候。物ノ定相ナキ喻ニモ、如夢幻泡影如露亦如電トコソ、金剛經ニモ説レテ候ヘバ、若某ガ首ヲ刎ヨト云夢ヲ被御覽候ハゞ、無咎共如夢被行候ハンズル歎。報国ノ忠薄シテ、超涯ノ賞ヲ蒙ラン事、是ニ過タル国賊ヤ候ベキ。」トテ、^①則補任ヲゾ返シ進セケル。

。「吉野山」

(九) 太宰作品の主人公、眼夢は里人から馬鹿にされ、「すりばちをかさにして持つて来て、これは富士山の置き物で、御出家の床の間にふさはしい、安くします」と売りつけられる始末。この、すりばちを富士山の置き物云々の個所は、次々と女房を替えて身代をつぶしてしまった男が、五人の女房の様子を語った手紙、『萬の文反古』巻二ノ三「京にも思ふやう成事なし」の中、御所に勤めていた女を女房にした時の話で、

(前略) さりとは世間の事にうとく秤目しらぬは断りなるが摺鉢のうつふせなるをふしをうつせし焼物かと詠め(後略)

という、庶民生活を知らぬ女房の非常識なおかしみを、借用したものであつて、太宰はそれを巧みに里人の図々しさに変化させている。

以上九例は、借用の個所を明確に指摘できるものである。

次に、借用個所は明確に指摘できないが、着想上、ヒントをえたとと思われるものをあげてみよう。

。「貧の意地」

(十) 妻の兄、半井清庵から小判十両の合力を受けた原田内助は、浪人仲間を雪見の宴に招待する。西鶴の原文では、「以上七人の客。いづれも紙子の袖をつらね。時ならぬ一重羽織。どこやらむかしを忘れず。」という服装でやって来るが、この浪人達を太宰は次のように描写する。

紙衣の皺をのばして、傘は無いが、足袋はないか、押入れに首をつつ込んで、がらくたを引き出し、浴衣に陣羽織といふ姿の者もあり、単衣を五枚重ねて着て頸に古綿を巻きつけた風邪気味と称する者もあり、女房の小袖を裏返しに着て袖の形をごまかさうと腕まくりの姿の者もあり、半襦袢に馬乗袴、それに縫紋の夏羽織といふ姿もあり、裾から綿のはみ出たどてらを尻端折して毛臍丸出しといふ姿もあり、ひとりとしてまともな服装の者は無かつたが、(後略)

この長屋の人々のおかしな姿の描写は、『好色一代女』巻の三「町人腰元」の書き出し部分、葬の行列の描写、

それよりすゑぐは糊借の者と見えて。うら付の上に麻の袴を着るも有。糊足袋はけども脇指をささず。手織嶋のかたじらのうへに綿入羽織きるもおかし。

これらの換骨奪胎ではないかと考えられる。

。「猿塚」

(七) 「あけの秋一人の男子を設け名を菊之助と呼て秘蔵是にかゆるものなしと寵愛するにつけても。むかしのくらしの程思ひくらべ果報なき子の行末まであわれに不便ふかくそだてぬ。」という原作の「むかしのくらしの程思ひくらべ」という部分を太宰は次のような具体的な描写にかえている。

(前略) それにつけても、この菊之助も不憫なもの、もう一年さきに古里の桑盛の家で生れたら、絹の布団に寝かせて、乳母を二人も三人もつけて、お祝ひの産衣が四方から山ほど集まり、蛋一匹も寄せつけず玉の肌のままで立派に育て上げる事も出来たのに一年おくれたばかりに、雨風も防ぎかねる草の庵に寝かされて、木の実のおもちやなど持たされ、猿が子守とは、(後略)

この個所は、『西鶴置土産』巻三ノ三「算用してみれば、一年式百貫目つかひ」、

人の仕合は定め難し此子一兩年あとに生れ出なは。抱守つきくをきれいに小袖のにしきをひるかへし。宮参りなどいかめしくあるべきを。今の身となる宿に生まれきて。あらためての産着はおもひもよらず。肌には紙子切くなるを継集めうへには神祭にこしらへし子ども細工の具足をきせ。いまだ忌もあかぬによろひの着初おかし。

からの着想であろう。

。「破産」

(八) 萬屋の主は、なかなかの始末屋で、「(前略) 元日にも聳入の時仕立たる麻袴にして、四十年此のかた礼義を勤めける。世は何染何鳴が時花共かまはず。浅黄の七つ星小紋に黒餅着物は花色より外は紅葉も藤色もしらず。幾春をか送りぬ。」と原文にある。この個所に相当する文章を太宰の作品からひいてみる。

(前略) 世には何染、何縞がはやらうと着物は無地の手織木綿一つと定め、元日にも聳入の時に仕立てた麻袴を五十年このかた着用して礼廻りに歩き、夏にはふんどし^①一つの姿で浴衣を大事さうに首に巻いて近所へもらひ風呂に出かけ、(後略)

傍線部①は、松谷昭彦氏が指摘されているように『日本永代蔵』巻二ノ一の藤屋市兵衛の描写をふまえて成ったものである。傍線部②は『萬の文反古』巻五ノ一「広き江戸にて才覚男」、

我等老万両の身体なれども今に風呂屋へ供つれずゆかたを自首にまきて入にゆき申候

という、けちぶりをひねったものであろう。

(三) 女房が格気しなくなると、亭主はこの時とばかり、上方へのぼって気保養して来ようと浮かれだす。この亭主の留守中の家の様子を太宰は原作に付け加えて描写しているが、その描写の中の、

(前略) (女房) 毎日着物を下着から全部取りかへて着て、立つてくにやりとからだを曲げて一座の称讃を浴びれば、(中略) お竹は、鏡に向つて両肌を脱ぎ角力取りが狐拳でもしてゐるやうな恰好でやつさもつさおしろいをぬたくつて、化物のやうになり、われとわが顔にあいそをつかしてめそめそ泣き出し、(後略)

は、『西鶴織留』巻五ノ二「一日暮しの中宿」の次の文章あたりから、着想のヒントをえたと考えられないであろうか。

よき風成美女の当世仕出しを常に浦山敷髪かしらの目立程に中ひく成顔を無理に鼻つまみあけて一度の大願にやうきひの匂ひ粉をぬりくり寒紅も此時の用に立。

腰居てのぬき足いかに公儀の大道なればとて我物にして身をひねる事。よほど人の目も恥しき儀なれどもまよざて。(中略)されども誰中宿に付込あれをと恋わたる人もなくて後には我と我身に不思議立て世には目くら多し。おそらく我等が身振けふの彼岸参りの中三人ともさからぬと思ひしにとか悪うて思ひつかぬそと鏡横に見たり取直したり笑ふて見たりひとり。狂言せしうちによくくみれば我足なから男足袋さへちいさき事にあいそつきて。

(中略)物に三寸の見直しとはいへとたいいに四寸程幅の広き足なれば。人の興も覚ぬへし女はひとつ思ひ所ありてもかなしやさひしやと。

また、亭主が遊び出すと家の者まで遊び出して、すっかり財産をなくしてしまうという話は、『西鶴置土産』巻一ノ三「偽もいひすこし」に類似のものがある。次にその個所をあげる。

此の大臣にもよき手代あらば是ほどまでには成まじきを。出入の者も皆悪所にして鶏めしをふるまはれて。羽織かり取にして帰るも有。家請を頼みながら。疊の無心を申も有。喧嘩するひてん書を預て金子十両無理がりにするやら。よる所。さはる所にて取ひしがれ。財宝ざらりと埒明てむかしの風俗四五年にかはりて。

(後略)

(十四) 上方に上った旦那は、はじめは田舎者らしくおっかなびっくり茶屋にあがって、けちくさい遊びをたのしんでいたが、茶屋の者たちにお世辞を言われて思慮分別を失い、大胆になって遊びだし、金をばらりばらりと投げ捨てる。このところで、旦那が茶屋の女達にみごとな遊び方だとおだてられる場面を、太宰は書き加えているが、このような場面は、『西鶴置土産』巻一ノ三「偽もいひすこして」や好色物にしばしばみられるものである。次にその一例として『西鶴置土産』巻一ノ三から該当する個所をあげる。

何やかや。取あつめて春まごの勤めども残らず御無心中。そのうへに正月の事いまだ間のある義なれども。外に申方なければと。さゝやけば。此男にげる分別かはつて。いかにも拙者請合と。たしかに宿へ申わたせば。亭主は珍重。さても見事なあそばされやう。おそらく十月朔日に正月の極まりし女郎。新町広しと申せども。此大夫さまの外にあらば。いふてござれ。この首水もたまたまずやるは。こんな大臣のお宿には今時分から仕着物が仕廻て有物じやと。むしやうにのぼされ。前後かまはず。一座は柳にやつて立けるか。

なお、△暗闇に鬼√のたとえとして松谷氏は『世間胸算用』巻五ノ三を指摘されているが、『日本永代蔵』巻四ノ三「仕合の種を蒔錢」にも「闇に鬼をつながごとく」とある。

。「吉野山」

(十五) 太宰作品の主人公は、里人にどしどし金を巻き上げられ、友人に観音像を質屋から出して、売ってくれたのむ。そして、

ついでに私の寝間の、西北の隅の畳の下に色紙一枚かくしてありますから、あれも佐兵衛のところへ持つて行つてみて下さい。あの色紙は、茶屋の枕屏風に張つてあつたものですが、私はもてない腹いせに、ひつばがして家へ持つて帰つたのです。雪舟ではないかと思つてゐるのですが、或ひは贖物かも知れません。とにかく佐兵衛に見せて、そこはあなた様も抜け目なく、相応の値段で売りつけてやつて下さい。贖物であつても、出来は悪くない色紙のやうですから、五十兩と吹つかけてみて下さい。

と言つている。この、茶屋の枕屏風に張つてあつた色紙をはいできて、それを売つて金を得ようとする発想は、『日本永代蔵』巻四ノ二「心を畳込古筆屏風」の、

花鳥といへるに逢初しよりあさからず常よりしめやかなる枕屏風を見しに両面の惣金にして古筆明所もなく押けるがいづれかあだなるはなかりし。中にも定家の小倉色紙名物記に入たる外六牧見程時代紙正筆に疑ひなし。いかなる人か此太夫には送られしと欲心発りて遊興は脇になりぬ。それより明暮通ひなれて上手を仕掛しにいつとなく女 悩て我黒髪も惜からず切程の首尾になりて彼屏風貫かけしに子細もなくくれける。取あへず暇乞なしに上方にのぼり。手筋を頼み大名衆へあげて大分の金子申請て又むかしにかはらぬ大商人と成て眷属あまた召つかひ。

から、ヒントをえたとと思われる。

以上私の気が付いた借用例について列記してみたが、これらを西鶴の著作年譜（俳諧関係は除く）にてらしてみると次ページの表のようになる。

この表から太宰が西鶴のかなり多くの作品に目を通してること、その中でもとくに『日本永代蔵』『世間胸算用』『萬の文反古』など著名なものから多くとっていることがうかがえるであろう。

次に、これら太宰の借用部分にみられる特徴について簡単にのべてみよう。

まず、太宰の借用した原文の特徴については、借用が西鶴の種々の作品にわたっているため、明確な特徴はつかみえないが、ただ、それらの原文のどこかに笑いの要素を含んだものだ、ということは言えよう。このように、笑いを含んだ箇所を借用することは太宰が西鶴の作品の中に笑いをみていたということでもあらう。

次に、この借用した原文を、太宰はどのような個所に利用しているかであるが、それは大体次の二つに分けられるようである。まず一つは、青砥の性格を示したものの(八)や、また、「破産」のあるじの怙齋ぶりを示したものの(十)など、登場人物の性格描写の部分である。そして、二つめとしては(三)や(七)などのように、主人公たちの錯乱した状況描写の部分に使用されている、ということがあげられよう。この性格描写も錯乱の状況描写も、そのほとんどは、笑いにあふれた滑稽な場面となつている。

最後に借用の手法についてであるが、これらの借用部分が、西鶴の作品の中でそれぞれどのような意味合いを持っていたかには関係なく、太宰がこれを自由に用いていることに注目したい。

『新釈諸国噺』が以上見てきたとおり、太宰が言うように、彼自身の空想だけによって創作されたのではなく、十二の原話以外にも数多

くの西鶴の作品を借用しているということは、巧みなパロディ作家として、太宰の資質の一面をあらわしていると言えよう。

なお、西鶴の作品を素材にしたものは、この『新釈諸国噺』だけでなく、他に二、三あげられる。たとえば『男女同権』（昭和二十一年二月）は、すでに暉峻康隆氏が『西鶴評論と研究』（下145ページ）で指摘されているように、『萬の文反古』巻二ノ三「京にも思ふやう成事なし」を、昭和一八年一〇月号の『文芸世紀』に発表された『不審庵』は、『西鶴諸国はなし』巻五ノ一「灯挑に朝顔」をそれぞれ翻案したものである。

（昭和四七年六月一〇日稿。昭和四八年一月一八日再稿。）

附記、(九)「吉野山」のすりばち云々の個所については、田中伸氏が昭和四七年一〇月号『解釈と鑑賞』「太宰治と井原西鶴―『吉野山』を中心に」で指摘された。